

の抜けたソ満国境をカムフラージュするために、敗戦の三月前まで、続々と農民は送りこまれていたのだ。

夫は帰らず

長崎県 野田 静子

二十年四月十日、忘れもしません、あのうらめしい赤紙の届いた日でした。主人の母にも、主人にもだまっつて破つてしまおうかとさえ思つたものでした。出征の五月一日はよく晴れた日でした。街路樹のしだれ柳の芽の美しかったこと、あの色が今も目に残っております。

玄関で見送る主人は、母と子供を頼んだよ、とじつと私の目を見つめたまま、さつと足をひる返して出て行きました。「父さん早く帰つて来て」ノド元まで出た言葉が言えませんでした。どうしてあの時に言わなかったと、今だに口惜しく、切なく思い出されてなりません。

「あの時に言い忘れたる大切の」と言われる言葉、それは「父さん早く帰つてきて」の言葉でした。それから早くも三か月は過ぎて、八月十五日、敗戦のお言葉を聞くことになりました。主人は撫順の満鉄の工事に部につとめておりましたので、満人の交際も多く、親しい友人もたくさんおりました。十五日の敗戦の日よりわずかな日数だつたと思います。中国の友人がある日、突然夜おそく訪ねてくれ、「太々^{タイタイ}早く荷物をまとめて、逃げなさい、ここはあぶない」と教えてあたふたと帰つて行きましたので、隣り近所にも知らせてみましたが、皆半信半疑の様子なので、私達だけ逃げるわけにはゆかず、とどまっております。その夕方、現地人の暴動にあい、家ぐるみ、身ぐるみ、丸裸同然で、煉瓦建二階の家族五世帯が身につけていた、わずかな現金だけで、夜のうちに友人、知人の家に頼らねばならなくなつてしまいました。そのみじめさといつたら、たとえようもなく、切ないものでした。二、三日たった、事務所のはからいで、会社の独身寮を開けていただき、その夜はつかれと不安で過ごしました。

四、五日、身体を休めることが出来ました。翌朝、目が覚めたたん、お婆ちゃんと子供をどうして食べさせるのかと思うともうじつとしておられない気持ちで、二人を残してふらっと町に出ました。頼るのは満鉄住宅に住む学生時代の友人達です。皆でかわるがわるにきては、親切に慰め、はげまして食糧等を持って来て下さるのでした。

八月も末ともなれば寒さが身に沁みてきます。暴動にもあわずに、ぬくぬくとしているからといって、毛布、布団、衣類等、集めて持ってきてくれました。

町に居留民会が発足し、だんだんと難民のわれわれもなんとか暮しが立つように、民会の有志の方々のお世話で、仕事の世話、病人の世話等、北満、北鮮の人びとの世話、死人の世話に至るまで、気を配るようになります。素寒貧になっても何とはなしに安心できました。そして民会のお世話で、満人の靴職人の張さんの家に女中として朝八時、夜は六時日銭を貰って帰り、途中で子供達に大きい支那まんじゅうを買って帰れるのが嬉しくて、毎日元気に働きました。

武装解除された日本兵が、町はずれの寺の庭で手榴弾で自爆した話、ソ連兵が押し入ってきて娘さんとお母さんを手ごめにし、その場でお母さんが舌を切って自殺をした話、北満から逃げてきた孤児が、あちこちに入って、食べ物を持って行った話、等々。一番哀れなのは、北鮮、満州の難民のお父さん、お母さん達が亡くなったかたわらで、赤ん坊が母親の乳房をくわえて泣いている様子、まだ幼い子供が母親にすがりついている姿、あれが本当の地獄絵そのままだと語りあいました。その様な死体を、民会の人びと、地区の人達の世話で、撫順の南方を流れる運河コシガという川辺の砂利の上に山のように積み上げた死体の山が日に日にうず高く山数を増していきます。残った者達で、供養しあちらこちらから線香のけむりが棚引いてまいます。神様は、きつと「人間は愚かというも哀れなり」と天上より見下ろしていたかも知れません。

年もあけた昭和二十一年の一月、三度目の移動をしました。港で帰国が始まるという噂です。それで、女、子供だけの世帯なので少しでも撫順の駅に近い収容所

に入れて貰うことが出来ました。その日も暮れた七時頃だったと思います。収容所の外がざわめき始めましたので、窓からこわごわ、のぞきますと、どうも中国人同士争いのようです。おかしいなと同窓の方々とささやいていると、八路軍（共產系）国民軍（蔣介石）とが入れかわりをするための戦いだつたと聞かされました。世帯道具といつても、わずかな荷物です。

けれど母に子供、五歳と三歳の手を引かせ、私は靴屋の主人のおかげで、人の良い洋車ヤンチョを連れてきてもらい、今までの、人様の情けの衣類、布団等に乗せて貰い、無事に収容所に参りましたが、朝、粟がゆを食べただけの四人は、もうふらくでしたが靴屋の御主人が大きなまんじゅうを十個も持ってきてくださったので、口もきけないほど嬉しくて、有難くて、母と二人ポロポロと泣きながら手を合わせました。張さんは笑いながら、心配ない心配ない太々（奥さんのこと）いい人、私奥さん感謝してるよ、

謝々く、日本に帰るまで、家来るいいよ、サイナラ、さいならと帰って行かれました。満州の冬はきび

しく、積もつた雪は何日の間にか凍りつきます。その上を、音をたてながら帰って行かれました。私は張さんの後姿が見えなくなるまで、外に立ちつくして見送りし、頭を深く下げたお札をしておりました。

一月、二月と、きびしい満州の冬が明け暮れ、道を行く日本人の姿が哀れに垢にまみれて見えるようになった五月、ようやく雪解けが始まった頃帰国の伝達が始まりました。

五月二十四日 撫順市外の駅より無蓋車に乗車
六月 一日 あちこちで止められ、コロ島着

八日 L S T に乗船

十四日 正午過ぎ佐世保着

引揚げてからの苦労は又筆舌につくせない。